

歴史研修会

壬申の乱の跡をめぐる



9月25日、残暑が残るが秋晴れの中、歴史探訪に出発。午前8時バス満杯の26名、遠近を厭わずの参集でした。歴史には「壬申の乱」は扱い小さく、天武天皇即位後の記述が大半です。ご参加の方々は 知見をお持ちで熱意を感じました。私は前夜のわか勉強での参加で心細く乗り込みました。資料が配られ、造詣の深い杉本さんの解説、万葉歌の朗詠、一気に1300年前の世界への誘いでした。天智天皇と共に、大海人皇子は長く政治の中心にあり、直轄領が美濃の国であった事等を知ると、吉野からの遠い迂回の道のりが腑に落ちたものです。

多賀SA休憩後は、森さんによる「行路メモ」の説明、懸命の吉野への脱出、伊賀越え等の驚異的な1日行路。兵を集めつつの地盤とする豪族への働き掛け、皇子達の合流、不破ノ関での指揮・大津への進軍等が語られました。

不破ノ関資料館に到着。史跡ガイドの細見さんが出迎えてくれました。「壬申の乱」の探訪の方は、知識が深くて…と言っておられたのですが、次々とエピソードが語られ名解説が続きました。あちらこちらを見学、瞬く間に時間が過ぎてゆきました。目の届く道路や石垣等真っ赤なヒガンバナが咲いていて、周囲の景観とマッチして素晴らしい景色です。

「藤古川」は小さな川ですが、1300年前に対峙した頃は、かなりの深さであったでしょう。その兩岸の集落は、戦乱の後、川を越えての結婚・縁結びは近世まで禁止されていたようでした。対峙した二つの勢力が、「不破ノ関」で激戦を展開したという記述は、日本書紀にはないようですが、地域の厳しい掟は厳しい怨念を残したのでしょう。「ゴ—」と新幹線が走り抜け、在来線、名神高速道路と主要幹線が、今もこの狭隘な交通の要所を行き交っていて、「不破ノ関跡」の感慨から現実に引き戻されます。



(不破ノ関資料館 ビデオ解説を見る↑)

昼食後、戦勝後も指揮を執ったと言われる「野上行宮跡」を偲び、桃配山で「関ヶ原の合戦」へと結びつきます。石田三成陣所からの俯瞰は、不戦や寝返りが戦況を変えた事を実感させます。大海人皇子も家康公も経験豊富、その上何か特別なオーラがあり、「人間力の差？」が左右したのではと感慨深いものがあります。天武天皇は、天皇の地位を確立させ、伊勢神宮を格上げし、律令の制定事業に着手と、国家支配を固めた偉業の人だったのでしょう。岩本先生の補説を耳にしつつ、柔らかな西日に向かってバスは快走し、夕刻予定時刻に到着し満足感溢れる旅でした。

(阿部和生)